

新発田歩兵第百十六聯隊奮戦記

【第7回】冬季作戦

新発田駐屯地援護室 佐藤 和敏

昭和十四年十一月十日、新任の村井大佐（第三代聯隊長）は宍城の聯隊本部に着任せられた。

時恰も、蒋介石の冬季攻勢の声に踊りて、地区周辺の敵は積極的蠢動を始め、十二月月上旬以来襄河を渡河し、しばしば出撃して来るようになり、活発なる行動を開始した。

「聶家場附近の戦闘」

師団命令に基づき、臨時佐々木大隊（隊長佐々木大尉）を編成し、十二月十九日行動を開始。同大隊は二〇三〇岳口に到着、第二十九師団久保少佐の指揮下に入った。

敵は当時、聶家台、易家台、李家台の線を占領していた。二十日〇八四〇戦闘準備完了と共に、朱家場に向い前進、遂次敵の前進陣地を駆逐しつつ一四〇〇李家湾に進出したが、敵は朱家場及び黄家台の線を主陣地となし、堅固なる既設陣地に抛り頑強に抵抗した。

大隊は直ちに之に対し攻撃を開始し、二十二日敵左翼要点たる黄家台に迫り、歩砲の緊密なる共同の下に、石井、森の両中隊は壮烈なる突撃を敢行し之を奪取した。

二十三日、敵の退却を知るや直ちに追撃を開始し、二十四日彭家場に進出するや旅団命令により左追撃隊となり胡家場に突進を命ぜられ、進路上の諸部落の掃蕩を実施しつつ郭家新場に至った。

二十五日、師団主力の転進を容易にする目的を以って、先遣隊となり南新集に向い急進した。途中軽機を有する約五十の敵を撃退し夜半安陸に到着、同地に於いて師団予備隊となる。二十六日、洋梓鎮に至り待機す。二十七日、官橋舗に集結を命ぜられ早朝現在地出発。二十八日、聚石嶺附近の敵を突破し三十日、潘家冲附近の敵螺集部隊を急襲、潰滅的打撃を与え夜半官橋舗に到着、新たに一〇三旅団長の指揮下に入る。

三十一日、転戦又転戦による疲労を憇ういとまなく黄家集に向い急進、明ければ昭和十五年一月一日、記念すべき紀元二千六百年の元旦を陣中に迎え、大隊はこの日、前田大隊と呼応し扶児嶺の敵陣地を奪取し、以って十数日孤立無援の苦闘を続けていた王家嶺警備

隊及び輜重兵の一部を救出し其の目的を達成した。

一月二日〇二〇〇～〇四〇〇の間、大隊正面に数回に亘り敵逆襲し来り、夜暗の裡に息詰まる如き壮烈なる戦闘を継続し、第一線中隊の奮戦により之を撃退した。翌三日、命により佐々木大隊は編成を解かれ、中隊は夫々各々原所属に復帰した。

「京山西方地区の戦闘」

敵第十四師は、孫橋鎮西方高地一帯に亘り三線に陣地を占領し頑強に抵抗した。

師団命令により、聯隊は一月六日一五四〇、重点を右翼に保持し歩砲共同の下に攻撃に転じたが、敵は予想以上の兵力に加え、聯隊への増加は柴大隊（歩五十八聯隊）のみで、江口大隊（歩六十五聯隊）は未だ到着せず、遂に夜に入り、以って夜襲を敢行した。力攻努力したが地の利に占める敵は頑強にして動かず、止む無く聯隊主力を以って攻撃するに決した。

七日払暁、江口大隊到着に伴い攻撃を続行し、先ず第一線陣地を奪取、続いて砲兵並びに各種兵器の集中射の援護の下に柴大隊は敵陣深く突入、江口大隊又敵の松山高地を力攻、下士官候補者中隊は、左翼方面より敵陣に突入し一五〇〇第二・第三陣地を奪取した。

爾後一挙に官橋舗に突進し一七〇〇同地警備隊を救援した。

敵第十四師の兵器装備は、相当優秀にして、新品の軽機・自動銃・機関銃・重てき弾筒等を有し、其の機能又見るべきものがあつた。

「長嶺附近の戦闘」

長嶺附近の敵を攻撃の目的を以って一月九日夜半東京鎮を出発した。聯隊は途中、黄家集警備隊より敵情を聴取した後、分水嶺西側地区に前進するや同地附近より敵の射撃を受けた。

高橋隊を以って同地方向より、聯隊主力は西進し胡家坡より刘家店西方台上に展開、長嶺攻撃を準備した。

十日払暁、重点を右翼に保持し攻撃を開始した。敵は陣地を数線に配備し頑強に抵抗するも、我が歩砲の緊密なる共同により、森・小林両中隊の壮烈なる突撃敢行により第一線を突破した。

爾後聯隊は敵の左翼を席捲しつつ、同夜第二線陣地に肉薄した。この日正午頃より聯隊

本部附近は、敵の迫撃砲の集中射を受けも極力攻撃を続行した。

敵兵力は我に比し著しく優勢で、前日に引続き十一日は敵の迫撃砲の乱射乱撃、一時五～六十発の集中射を受けるのみならず、敵正面著しく広く遂次我が右翼方面に増加し来り両翼包囲する企図にでたが、聯隊は絶えず右翼方面から戦果の拡張を図り、一二二〇敵右翼に対し赤筒を使用、敵はにわかに陣地を棄て後退、以って急追し第二線陣地を奪取した。

十二日一〇三〇、長嶺高地に対し砲兵並びに各重火器の集中射を実施し、第一線の勇敢なる突撃により一三三〇同高地を占領した。

爾後しばしば敵の逆襲を受けるも、徹底的に痛撃を与え之を撃退した。各第一線部隊は白兵を以って突撃を敢行し第三線陣地を完全に占領した。

十三日、更に歩砲密接なる共同の下に、三角山に対し重点を指向、特に一二〇〇飛行機と共同し敵陣地に突撃を敢行したが、敵又決死隊を以って逆襲、彼我手榴弾を以って攻防の限りを尽くしつつ敵陣地に突進した。この際三方より敵十字火を浴びたが奮戦し、二一〇〇同高地の争奪に力闘した。爾後師団命令により戦場を離脱し、後方に集結した。

「三陽店北方地区の戦闘」

一方三陽店北方地区（第一大隊警備地区）に於いても、十二月十二日以来敵接近の兆しあり、十五日、約一千の敵は太陽山警備隊を攻撃し来り此処に戦端は開かれ各所に於いて彼我の銃砲声盛んとなり、応城に到着した補充員は息つく暇なく赴任し、早くも途中敵と遭遇、銃なき者は竹槍を以って突撃する等壮烈なる戦闘を惹起した。斯くの如き状態の裡に新年を迎え、一月末まで絶えざる敵襲に対し、猛反撃を加え多大の損害を与えた。敵は三陽店附近に陣地構築し堅固なる鹿砦を作り我と対峙の状態に入った。

二月一日聯隊は、師団の企図に基づき戦闘指令所を宋河鎮に推進し、討伐準備に入った。

二月六日払暁より、敵の警戒部隊を駆逐し左側背を包囲攻撃、歩砲共同し遂次敵を攻略した。特に砲兵中隊は敵団本部の位置と予想する賀家畷に対し、集中射を浴びせた。

一四五〇梅子冲西方高地に進出したが、敵は此の附近より頑強なる抵抗を試み、聯隊は夜に入るも攻撃を続行し、左第一線の第二大隊は夜襲を決行し敵陣を奪取した。

七日左翼隊方面は、雲霧尖方向より敵集中火を被り戦闘進捗せず、依って一部を以って左翼を援護しつつ主力を中央隊に移し力攻、賀家畷南方の線に進出した。敵は算を乱して小阜街方向に潰走、聯隊は之に対し多大の損害を与え、爾後敗敵に追尾し急追、稜線上を後退する敵を砲撃により潰滅を図り、八日多大の戦果を挙げた。

この間工兵隊は敵の根拠を徹底的に覆滅し再び敵侵入に余地を排除した。

斯くして蒋介石の企図する攻勢は、各隊の勇戦奮闘により完膚なきまでに之を撃砕することを得た。

第三大隊は仙桃鎮附近の警備を交代し、主力は皂市に至り師団の直轄となった。

(参考文献「聯隊歴史 歩兵第百十六聯隊」より)